川上 高司 ブログ アーカイヴ

2014年

10月8日

忘れられたアフガニスタンーその復興の現実

アフガニスタンの米軍は今年の 12 月末には撤退する予定である。それに合わせて ISAF も撤退しつつある。アフガニスタンの再建のためにアメリカや国際社会が力を 入れてきた復興事業はアフガニスタンの人々に何をもたらしたのだろうか。

首都カブールの近郊の街を始点として中部のバーミヤンまで舗装された高速道路の建設が予定されている。これは 2002 年イタリアがアフガニスタン政府の要請を受けて建設にとりかかった夢の道路だった。当時アフガニスタンには舗装された道路は全国で 100 キロほどしかなかった。新しく建設される道路は全長 134 キロ、バーミヤンは石窟の仏像が世界的に有名で、道路ができれば多くの観光客が訪れ貧困地域である地元が経済的な恩恵を受けると高く期待された。また、タリバン支配を打倒して国家創造に浮かれていた欧米の復興事業の象徴となるはずだった。

建設は 2006 年からスタートし、第 1 期 54 キロの建設は中国が請け負った。完成したのは 2011 年、実に 5 年もの歳月がかかった。カブールからバーミヤンへの道が通るのはタリバンが支配している貧困村落が点在する地域だった。タリバンからの攻撃、誘拐などあらゆる危険との闘いの中での作業は難航し中断を余儀なくされた。中国は任務を終えると建機を置いて一目散に撤退し二度と戻ってこなかった。第 2 期の86 キロまではアフガン企業、86 キロから終点までの134 キロはイラン企業が請け負った。 途中には標高 3 7 0 0 メートルの峠があり冬の積雪は8 メートルにもなる最大の難所となっている。だが、予算がないのでトンネルは掘れない。結局冬期は閉鎖するしかない。

そもそも道路が舗装され完成しているのは始点から 54 キロまでで、残りは土埃の舞う道となっている。そして工事が終点にたどり着く前に先に完成した部分の舗装がすでに修繕が必要となっているものの、修繕は予算上不可能となっている。イタリアは当初の予算以上は1銭も出す気がないため夢の道路は永遠に完成しない。その上相変わらずタリバンの攻撃が盛んなため地元でも「なにがあっても使わない」というデス・ロード、「死の道路」と呼ばれて敬遠されている。

それでも終点のバーミヤンでは、リゾート地としての準備が進んでいる。スキーやスノーボードの用具が、ニュージーランドやオーストリア、スイスなどから寄付を受けて山積みになっている。確かにバーミヤン地域自体は比較的治安がよい穏やかな地域である。山もありウインタースポーツには最適だ。だが、そこに行くのは命がけである。「10 年後にはきっともっと気楽に来られるようになっているさ」と地元のビジネスマンは楽観的だが、あきらめにも似ている。

撤退ムードに包まれた欧米はアフガニスタンへの関心を急速に失いつつあり復興

事業もこのまま先細りは否めない。アフガニスタンは世界から忘れられつつある。この「死の道路」は、欧米諸国に振り回されたアフガニスタンを象徴している。

10月16日

ISISからの脅威におびえるクルド人の街ーアメリカさも口を挟めない冷徹な地政学

アメリカとトルコが、ひとつの街をめぐって鋭く対立している。トルコとシリアの 国境沿いでシリア側に位置するその街はアイン・アル・アラブ、別名コバニと呼ばれ る、シリアのクルド人たちの街である。

その街が今、ISIS の猛攻にさらされて陥落寸前の窮地に陥っている。ほとんどの住民は避難していて 3000 人ほどのクルド人戦闘員が立て籠もって街を守っているが、包囲している ISIS はおよそ 9000 人、街の北側はトルコとの国境で、トルコ軍が戦車を配置して監視しているため逃げることはできない。

この窮地にアメリカはコバニへの支援をトルコに要請するが、トルコは頑なに拒否し国境越しに監視するだけである。ISIS との闘いには多くの同盟国が参加しているがそれぞれの思惑があり自国の利害が優先する。必ずしもアメリカの思う通りにはならない。

トルコはアサド大統領が追放されることを望む一方で、クルド人が力を持つことは望んでいない。長年クルド人の過激派 PKK に悩まされてきたトルコにとって「PKKと ISIS は同じ」(エルドガン首相)なのである。積極的にクルド人を支援する気はない。また、クルド人を支援すれば ISIS の報復がトルコに向かうのは必至でありトルコ内へのテロが波及するのはなんとしても避けたい。離れているアメリカとは事情が異なるのである。

アメリカは「大量虐殺が行われる危険がある」と人道的に訴えてトルコを動かそうとするが、トルコはトルコとシリアの国境への米軍の派兵を条件に出すなど厳しく両者は対立している。アメリカは派兵してクルド人を守るのか、見捨てるのかの選択を迫られている。ここ中東にはアメリカでさえも口をはさめない冷徹な地政学が存在する。オバマ大統領の対 ISIS 政策はすでにほころび始めているようだ。

10月27日

イラン切り札ーバーンズ元国務副長官

イランとの外交の要であった、ウイリアム・バーンズ国務副長官が 10 月 24 日退職 した。イランとの核交渉はまだ道半ばである。関係者はみな、イランとの交渉が途切 れるのではないかと心配した。彼ほどイラン側から信頼されている外交官は他にはい ない。バーンズ氏の存在は大きかった。

バーンズ氏の外交力にはだれもが一目おいており彼自身多くの尊敬を集めている。 アメリカ政界の重鎮であるブレント・スコウクロフト氏は「たいてい国務副長官はど こで何しているかがすぐニュースになる。だが彼の動向は全く報道されずだれにもわ からない」と評する。バーンズ氏ほどバックチャンネルでの交渉に長けている人物は いない、というのだ。

しかも物腰は穏やかで謙虚、その実自国の国益は最大限追求するという、手強い 交渉相手である。だからこそ共和党政権でも民主党政権でも常に外交の現場で活躍し てきた。 レーガン政権の時に外交の現場に登場し、イラン・コントラ事件ではあまりにも 若すぎて問題視もされなかった。父ブッシュ政権時代には国務省で政策の立案に携わ りクリントン政権ではオルブライト国務長官に仕えた。子ブッシュ政権ではパウエル 国務長官の下中東担当に任命されたものの、政権はイラク戦争に邁進し外交どころで はなく「人生最悪の時期」となり、ライス国務長官になるとバーンズ氏はロシア大使 に就任した。

そしてオバマ政権になりイランとの外交を任されることになるが、持ち前の外交 力を発揮してアメリカとイランの外交関係を一気に改善へと導いた。

バーンズ氏の外交方針は一貫している。「外交とはとどのまつり、人と人のつながりなのだ」というのが、彼の外交官キャリアを貫く信念である。

バーンズ氏は、退職したものの引き続きイランとの核交渉の協議に関わっていく という。もしイランとの核交渉がまとまったら、それはまさしくバーンズ氏の功績と いえよう。